

愛知工業大学情報科学部情報科学科  
コンピュータシステム専攻

令和6年度 卒業論文

声に対する印象を用いた合成音声  
ライブラリ探索システムに関する研究

2025年2月

研究者 K21066 清水洸世

指導教員 梶克彦 教授

# 目次

第 1 章	はじめに	1
1.1	背景	1
1.2	研究目的とアプローチ	1
1.3	本論文の構成	2
第 2 章	関連研究	3
2.1	歌声に対して印象を推定する研究	3
2.2	合成音声の歌声にスコアを付与する研究	3
2.3	可視化・探索するシステムを提供するサービス	3
第 3 章	評価スコアを推定するモデルの構築	4
3.1	特徴量の抽出	4
3.2	モデルの構築	4
3.3	UTAU 音源ライブラリと UTAU 音源声質アンケート	5
3.4	結果の評価	5
第 4 章	声色見本帳	9
4.1	サービスの概要	9
4.1.1	ライブラリ探索	9
4.1.2	ライブラリ詳細の表示	9
4.1.3	探索対象ライブラリの追加	9
第 5 章	おわりに	10
5.1	まとめ	10
5.2	今後の課題	10
	謝辞の例	11
	参考文献	12

# 第1章 はじめに

## 1.1 背景

近年、人の歌声や喋り声をコンピュータ上で再現する音声合成ソフトウェアは楽曲制作やアナウンスなどに広く利用されており、その普及と同時に音声合成ソフトウェアの数も増加している。合成音声ソフトウェアの多くは合成音声ライブラリを切り替えて合成される声の種類を変更でき、ユーザが利用できる声の種類はソフトウェアの数以上に存在する。加えて、いくつかのソフトでは個人のユーザが自分の声からライブラリを作成して第三者に配布でき、そのようなソフトではライブラリ数は非常に多くなる。例えば、喋り声を対象とした合成音声ソフト COEIROINK ではユーザの作成した音声合成モデルが 350 キャラクタ分以上配布されているほか [1]、歌声を対象とした合成音声ソフト UTAU では同ソフト上で使用できる UTAU 音源ライブラリが 7000 キャラクタ分以上存在する [2]。このように、合成音声ソフトの利用者は使える声に対し非常に多くの選択肢を持っている。

合成音声を利用するシーンにおいて、声の持つイメージや印象は声を選ぶ上で考慮すべき要素である。例えば、重要な情報をアナウンスする際に舌足らずな声を使うと情報が伝わりにくくなるし、可愛らしいポップな曲調の楽曲に力強い声を使うと聞き手に違和感を与える恐れがある。用途に合った声質を持つライブラリの採択は、情報を伝える効果や楽曲の表現力の向上に寄与する。しかし、現状声の持つ印象を知るには実際に聴いてみるのが最も有力な手段であり、数多あるライブラリの生み出す声を十分な数聴き比べ適切な声を採択するには多大な手間と時間を要する。その結果として、ユーザがライブラリを選ぶ際にその多くが普段の生活の中で聞いた経験のある声や、知っているキャラクターの声を選択していると考えられ、ユーザ全体の中で使われる声には大きな偏りが生じている。万に近い数存在するライブラリのうち実際にユーザに用いられる声は一握りであり、ほとんどのライブラリはユーザに用いられず埋もれてしまう。

## 1.2 研究目的とアプローチ

本研究の目的は、多くの合成音声ライブラリの中から、ユーザの用途に合った声・ユーザのイメージする声に近い声を探索する効率的な手法の、実際にユーザが使用できるかたちでの提案である。このような手法が実現できれば、ユーザは声質に対する自身の要求を入力するだけで、膨大な数の合成音声ライブラリの中から要求に合った声を持つライブラリを効率的に採択できるようになる。これにより、ユーザは従来のように実際に多くの声を聴き比べる必要がなくなり、声の選択にかかる労力を大幅に削減できる。また、純粋にライブラリの持つ声質のみでの探索はこれまで埋もれていた多様な声質を持つライブラリの発掘にもつながり、合成音声ライブラリの制作者とユーザの双方への利益が期待できる。

本研究では、ライブラリごとの声に対する印象を数値化する機械学習モデルを構築し、それを用いてユーザの求める声に近いライブラリを探索するサービス「声色見本帳」を提案する。実際に作成したサービス画面を図 1.1 に示す。ユーザは求める声のイメージを評価スコアとして数値化し入力すると、そのスコアに近いライブラリを探索できる。本研究では特に、数が多く声質に関する既存のアンケートデータが存在する UTAU 音源ライブラリを探索対象として選定した。提案するサービスでは、声に対する印象を複数の印象軸ごとに評価スコアとして数値化する。この軸は既存のアンケートデータの項目から設定されており、例えば「性別感」という軸では、スコアの高低を女性らしい声・男性らしい声に対応させるなど、ユーザが直感的に理解しやすい評価軸になっている。各音源に対する評価スコアは、アンケート調査

で得られたデータを基に、音源ファイルから各評価スコアを推定する機械学習モデルを作成して付与する。機械学習モデルと音源ファイルを用いた評価スコアの推定によって、アンケート調査を行っていないライブラリに対しても機械的に評価スコアを付与できる。サービスは多くの人が手軽に利用できるようWebアプリケーションとして実装し、実際に使いやすいインターフェースを備える。さらに探索対象のライブラリをユーザの手で新規に追加できる仕組みを備え、現在では未登録であったり今後作成され新規に公開されるライブラリも将来的に探索できる、網羅的な声質探索システムの実現を目指す。

## 声色見本帳

2.7      5      3      3      3      5      3

☒ 声の性別   ☒ 滑舌   ☒ 特有性   ☐ 声の年齢   ☐ 透明感   ☒ 声の強さ   ☐ 声の明度

男性的   はきはき   癖がある   大人びた   クリア   力強い   明るい

女性的   舌足らず   素直   幼い   ノイジー   優しい   暗い

<   1   2   3   4   5   ...   24   >

検索

### 重音テト - 連続音

カサネテト



▶ 0:00 / 0:08

声の性別	滑舌	特有性	声の年齢	透明感	声の強さ	声の明度
2.67	5.33	3.27	3.6	4.47	5.2	5.4
-0.0	+0.3	+0.3	-	-	+0.2	-

### 波音リツ - 強連続音

ナミネリツ



図 1.1: サービスの画面イメージ

## 1.3 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。第2章では、関連研究について述べる。第3章では、ライブラリから評価スコアを推定する機械学習モデルの構築と、構築したモデルの推論精度に対する評価実験について述べる。第4章では、提案するサービス「声色見本帳」の設計と実装について述べる。最後に第5章として本論文のまとめと今後の課題について述べる。

## 第2章 関連研究

### 2.1 歌声に対して印象を推定する研究

本研究に関連する研究として、人間の歌声の情報を理解しやすい形で可視化する研究 [3][4] がある。この研究では、ある程度の長さがある歌声と、そのうちの瞬間的な長さの歌声を用い、それぞれで印象を推定するモデルを作成している。ある程度の長さがある歌声では、迫力性、丁寧さ、明るさの3軸に対してそれぞれのスコアを推定するモデルを作成し、推定を行なった。結果として、人の間でも印象の評価が大きく揺れるような歌唱などの例外を除き、十分な精度で印象を推定できた。また歌声のうち瞬間的な音声からは、印象に加えて声に対してイメージされる色を推定する試みも行っている。彩度など色の要素と表現語の一つとして挙げられた活動性との関係が見られるなど、声質の色での表現に対して一定の有効性が示されたものの、他の要素との関係については今後の課題とされている。この研究から、声質へのなんらかの評価軸を用いた評価スコア付与が可能である点や、それを用いた声質の表現は一つ的手段として妥当なものであると考えられる。

### 2.2 合成音声の歌声にスコアを付与する研究

UTAU 音源を対象に声質に対し評価スコアを付与し、そのスコアを用いて音源を探索するシステムを提案する研究 [5] が存在する。この研究でも本研究と同じく UTAU に評価スコアを付与、探索システムを構築し、実際にユーザが求める声を探索できるかを確認している。スコアの推定には UTAU を用いて合成された音声データを用い、重回帰分析とカーネル回帰分析での推定制度の比較を行なっている。また、推定されたスコアを用いて音源を探索する際には、ある2つのスコア行列間のユークリッド距離を目標類似距離とし、その逆数として定義した目標類似度を用いて音源を探索している。評価実験では、ユーザのイメージする声に近いスコアを入力し、目標類似度の高いライブラリを提示した。するとユーザが求めるような声を持つライブラリを探索できる結果が示された。一方でこの研究では、探索システムの実装に留まっており、探索アルゴリズムの検討や実際にユーザが利用できるサービスの提案は行われていない。

### 2.3 可視化・探索するシステムを提供するサービス

クリプトン・フューチャー・メディア株式会社と産業総合研究所によって開発された音楽発掘サービス「Kiite (キイテ)」では、その機能の一つとして「Kiite Radar」が提供されている [9]。ユーザは、楽曲の知名度やニコニコ動画上でのマイリスト率、楽曲を歌っているキャラクターなどの一般的な楽曲情報での絞り込みに限らず、楽曲の解析によって得られた曲の声質や踊りたくなるかどうかの印象をスライダーで設定し、その条件に合致する楽曲を探索することができる。加えて、全ての楽曲を分析した印象に基づいて2次元平面上にプロットされた印象マップが提供されている。激しい曲は左上に、軽快な曲は右上にプロットされるなど楽曲の配置には一定の傾向があり、ユーザはこれらを用いて直感的に楽曲を探索できる。対象が歌声でなく楽曲である点は異なるが、本来数値ではない印象を数値化し、それを用いて可視化・探索するという点で本研究と共通する部分があり、サービスを提供する上で参考にできる。

## 第3章 評価スコアを推定するモデルの構築

本研究では、UTAU 音源ライブラリに対して声質に対する評価スコアを付与するための機械学習モデルを作成する。それぞれのライブラリの音声から抽出した特徴量と、事前にアンケート調査などによって得られた評価スコアを用い、特徴量から評価スコアを推定するモデルを作成する。評価スコアの推論には学習データとして UTAU 音源声質アンケートのデータを、モデル作成には Python ライブラリである PyCaret を用いた。

### 3.1 特徴量の抽出

特徴量を抽出するためには、ライブラリを用いて複数の音階で「あ」「い」「う」「え」「お」「ん」と発声した音声ファイルを利用する。五母音と子音「ん」は連続して発声のできる音素であり、安定して音声の特徴を抽出できる。音階は A3, D4, G4, C5, F5 の 5 音階を用いる。複数の音階を用いる特徴量の数を増加させるほか、音声の音域による特徴への影響などを反映できると考えられる。

実際に用いる特徴量としては、MFCC, ZCR, F1~F4 の周波数を採用した。MFCC は音声の周波数成分を人間の聴覚特性に基づいて変換したものであり、話者認識などに広く用いられている。音声の声質に関連すると考えられるため採用し、本研究では MFCC を 64 次元まで取得し用いる。ZCR は音声の振動数を表す指標であり、音の高さやノイズの大きさによって振動数は変化する。音声の声を固定した今回の音声であれば、音声の声質に関連する指標として扱えると考え採用した。音響フォルマントは音声の共振周波数を表す指標であり、母音の識別に用いられる。同じ音素のフォルマント周波数でも話者の年齢や性別によって変化があり [8], 声の印象に影響があると考えられる。本研究では各音階と音素ごとの F1~F4 の周波数を取得し用いる。

### 3.2 モデルの構築

モデルの構築には Python ライブラリである PyCaret を用いた。PyCaret は機械学習モデルの作成を簡略化するためのライブラリであり、データの前処理からモデルの選定、評価までを一連の流れで行える。UTAU 音源声質アンケートの結果は Excel ファイルとして提供されている。このファイルに記載されている 240 種の UTAU 音源ライブラリのうち、現在でもダウンロードが可能であり、必要な音素が収録されていて、かつ利用規約上で研究目的を含む機械学習用途での利用が禁止されていない 168 ライブラリを対象とした。各評価スコアを推論の目標として与え、先述の特徴量から評価スコアを推定するモデルを評価スコアの 7 軸それぞれについて別々に作成した。学習時には、使用するライブラリから 3 割をランダムに選びテストデータとして、残りのデータを学習データとして用いた。学習モデルは PyCaret で選択できる手法のうち、連続モデルの中で学習後の R2 値が高かった AdaBoost Regressor を選択した。これは連続量である特徴量から連続量である評価スコアを推定するため、離散モデルよりも連続モデルの方が適していると考えたほか、離散モデルでの学習を試した際に過学習と見られる状況が多く見られたためである。

### 3.3 UTAU 音源ライブラリと UTAU 音源声質アンケート

本研究において探索対象とする UTAU 音源ライブラリは、無償で公開されている歌唱用音声合成ソフトである UTAU 上で使用できる音源ファイルであり、ソフトと同じく無償で公開されているものが多い。UTAU は波形接続と呼ばれる手法を用いており、音声データを切り貼りして音声を合成する。そのため、UTAU 音源ライブラリは主に合成に用いるためにできる限り一定の音程と音量になるように収録された収録者の肉声が収録されている。収録形式には複数の手法があり、単独音であれば各 wav ファイルにひらがな 1 文字に対応する音素が収録されており、連続音 (VCV) であれば「あんああいあうあ」[10] といった形で複数の音素が連続して収録されている。

本研究で実際に特徴量を抽出する際、音声合成は行わずこの wav ファイルを直接操作し音声合成の手間を削減した。必要な音素が収録された音声ファイルのうち、UTAU においては子音部とブランクとして指定されるタイミング間の音声を利用した。この範囲は UTAU 上で音声合成される際母音を伸ばすために用いる範囲であり、一般に安定して同じ声が収録されているため音声の特徴を抽出する上で適していると考えられる。複数音階の音声の生成には、音階ごとにライブラリで指定される wav ファイルからピッチシフトを行い、音声を生成した。

UTAU 音源声質アンケートはニコニコ大百科上で提言された UTAU 音源ライブラリに対する声の特徴を評価するためのアンケート規格であり、現在までにこの規格を用いて 250 種以上の UTAU 音源ライブラリに対してアンケートが行われている。このアンケートは表 3.1 に示す 7 項目について、それぞれ 1 から 7 までの 7 段階評価で 10 件以上のアンケート調査を行い、その平均を評価値としている。アンケートは各 UTAU 音源ライブラリごとに行われ、表情音源が複数存在する場合は各表情音源ごとに独立してアンケートが行われている。

表 3.1: UTAU 音源声質アンケートの評価軸

評価軸	低い値の示す表現語	高い値の示す表現語
声の性別	女性的	男性的
滑舌	舌足らず	はきはき
特有性	素直	癖がある
声の年齢	幼い	大人びた
透明感	ノイジー	クリア
声の強さ	優しい	力強い
声の明度	暗い	明るい

UTAU 音源ライブラリは数が多い点だけでなく、声質の依存先が生の音声ファイルである点や、音素情報を関連づける ini ファイルが一般的に用いられる形式であるため非常に扱いやすい点、UTAU 音源声質アンケートが存在する点が評価できる。無償で利用できるものがほとんどである点も、多くの合成音声の中から用いたい声を探したい利用者のニーズに合っている。ライブラリの声質を評価する上で、また利用者からの目線においても都合が良いと考え、本研究の対象として選定した。

### 3.4 結果の評価

構築したモデルによる推論の精度を評価するため、テストデータに対して推論を行い得た値と実際のアンケートによって得られた値を比較した。テストデータは先述の通り学習データからランダムに選ばれたデータであり、対象とした 168 ライブラリの 3 割にあたる 51 ライブラリを用いた。7 つの評価軸それぞれについて、テストデータでの精度を評価した結果を図 3.1、図 3.2 に示す。

図 3.1 では、横軸は評価軸を、縦軸はテストデータにおける実際の値と推測された値との誤差の二乗平均平方根 (RMS)、エラーバーは誤差の標準偏差を示している。RMS は実際の値と推測された値の誤差を示す指標であり、誤差が小さいほど推論の精度が高いと言える。結果として誤差の RMS は最も高い声

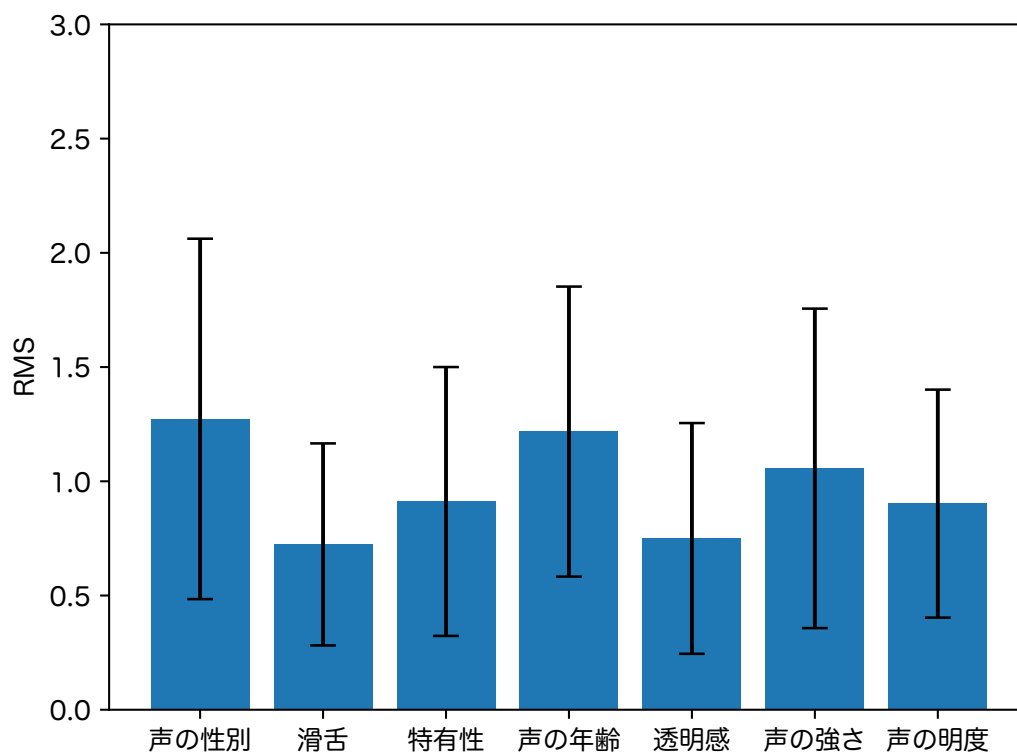


図 3.1: テストデータとの誤差の二乗平均平方根

の性別で 1.3 となった。これは先行研究 [6] の精度に近く、先行研究にて示された音響特徴量を用いたモデルの精度が再現できたと言える。

図 3.2 では、横軸は評価軸を、縦軸はテストデータにおける実際の値と推測された値との相関係数を示している。相関係数は一般に 0.7 以上であればデータ間に強い相関が、0.4 以上であればある程度の相関があるとされ、実際の値と推測された値における相関が強いほど推論の精度が高いと言える。結果を見ると、最も低い声の年齢は 0.20 とかなり低いものの、他の評価軸では 0.49 から 0.66 程度、最も高い声の強さでは 0.66 と、ある程度の相関が見られた。

相関係数の最も高い声の強さと最も低い声の年齢において、実際の値と推測された値の散布図を図 3.3 に示す。図を見ると、声の強さは右肩上がりの傾向が見られ、相関の存在が分かる一方で、声の年齢は点が縦に長く分布しているのが分かる。これは相関がないことに加え、実際の値はスコア範囲中に広く分布しているにも関わらず、予測された値がおおよそ 3~5 と範囲の中央に偏っていることを表している。この傾向は程度の差はあれど声の性別と声の強さを除く全ての評価軸においても見られ、精度を下げている一因となっている。

予測値が中央に偏る現象について、一般にはデータの偏りやモデルの過学習、特徴量の不足などが要因とされている。学習データを確認したが、テストデータのスコア分布からも分かるように、実際のスコアは広く分布しておりスコア的な偏りは認められなかったほか、モデルの過学習についてもそのような傾向は見られなかった。一方で、今回用いた音声特徴量が声質の印象に対し十分でなかった可能性がある。主に母音の音素に対して音階ごとに別々の特徴量を抽出したが、音素間の遷移の特徴などより複雑な特徴量も声の印象に影響していると考えられる。そのほか先行研究 [6] では機械学習の手法としてディープラーニングのモデルが採用されていたように、学習手法は複数のものが考えられる。様々な手法を試し、より適したものにすることで性能向上の余地があると考えられる。



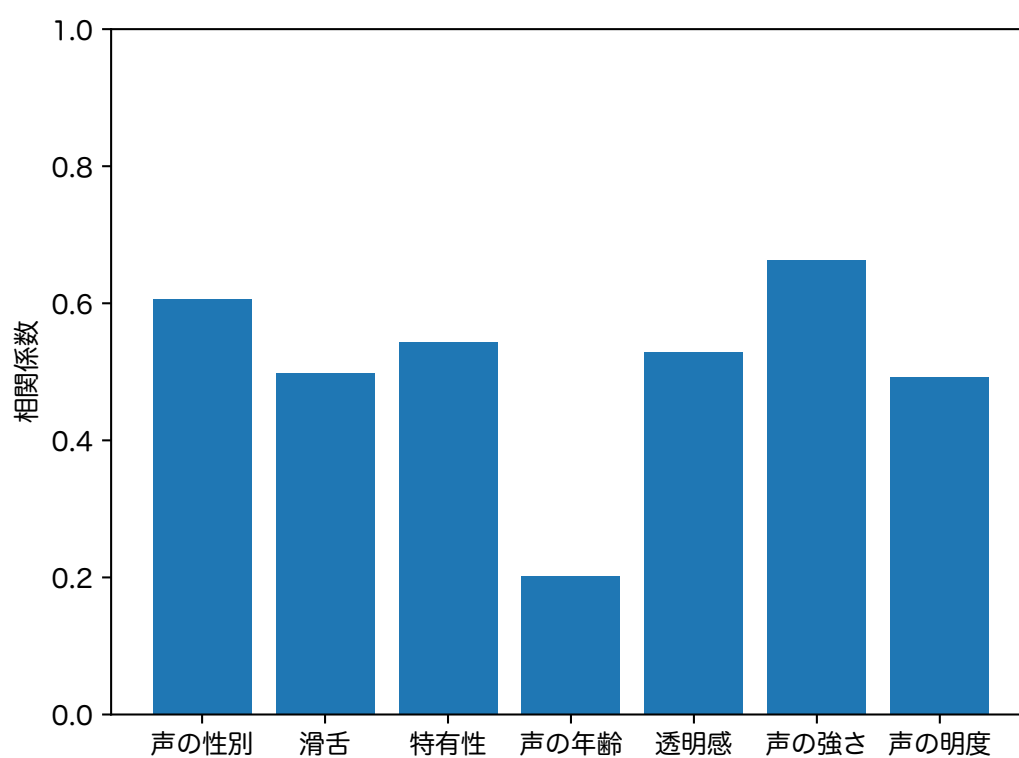


図 3.2: テストデータとの相関係数

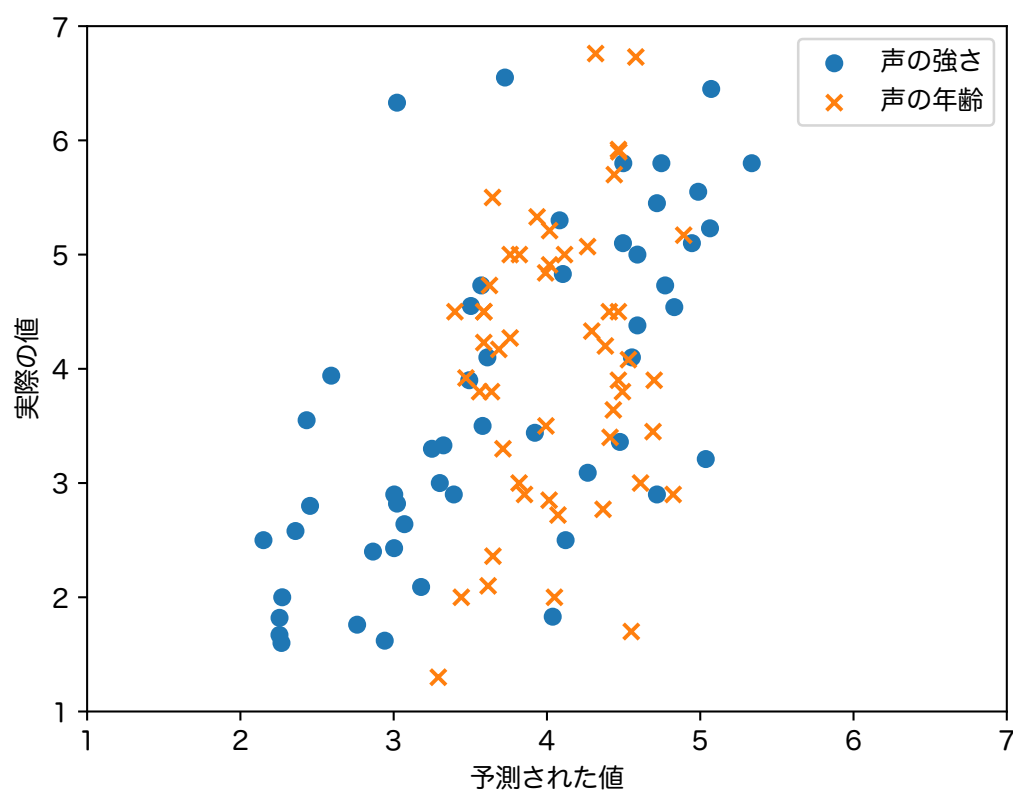


図 3.3: 実際の値と推測された値の散布図

## 第4章 声色見本帳

### 4.1 サービスの概要

本研究で提案するサービス「声色見本帳」は、ユーザが求める声の評価スコアを入力し、その評価スコアに近い合成音声ライブラリを探索・提案するサービスである。このサービスを利用すると、ユーザは自身が求める声に近いライブラリを探すことができ、多くのライブラリの中から自身に合った声を見つけることができる。サービスは Web サービスとして実装し、ユーザはブラウザ上で利用できる。

#### 4.1.1 ライブラリ探索

ユーザは求める声の評価スコアを 1～7 の間で入力し、その評価スコアに近い UTAU 音源ライブラリを探索できる。ユーザは先に述べた 7 項目のうち、任意の数の評価軸に対してスライダーを操作し、評価スコアを入力する。必ずしも全ての評価軸に対して評価スコアを入力する必要はなく、探索の際重視しない評価軸についてはチェックボックスのチェックを外すことで評価軸を無効化し、その軸を無視して探索を行える。サービスは入力された評価スコアに近いライブラリを探索し、その結果をユーザに提示する。評価スコアが近いかの評価には、ユーザに選択された評価軸での平方ユークリッド距離によって判断している。登録された全てのライブラリに対して距離の計算を行い、その昇順にライブラリを表示し求める声に近いライブラリを上位に表示する。

#### 4.1.2 ライブラリ詳細の表示

ユーザが探索結果として提示されたライブラリを選択すると、そのライブラリの詳細情報を表示する。詳細情報にはライブラリの名前、推定された評価スコア、サンプル音声、ライブラリの公式サイトや配布ページへの URL などが含まれる。サンプル音声としては、童謡の「かえるのうた」を Python ライブラリ「ScoreDraft」を用い事前に生成したファイルを用いる。本サービスはユーザが求める声に近いライブラリの探索のみを目的としているため、直接ライブラリをダウンロードする機能は提供せず、ユーザが自身で URL 先からダウンロードするよう促す。また、選択したライブラリの評価スコアを検索欄に転写できる。この機能を用いれば、あるライブラリに近い声質のライブラリを探したり、探索結果ページを送り反対に遠い声質のライブラリを探せる。

#### 4.1.3 探索対象ライブラリの追加

ユーザは UTAU 音源ライブラリをアップロードし、サイト上に存在しない UTAU ライブラリを自由に追加できる。すでに構築されたモデルを用いて評価スコアやサンプル音声などを自動で生成し、データベースに追加する。ユーザがライブラリを追加できるため、より多くのライブラリや、この先新しく生まれ配布されるライブラリに対してもサービスに登録できる。

## 第5章 おわりに

### 5.1 まとめ

本研究では、まずアンケートによって得られた評価スコアを目標とし、音声から特徴量を抽出してスコアを推定する機械学習モデルを構築した。その結果、声の強さなど一部の評価軸については相関係数 0.66 と一定の精度で推定できたものの、声の年齢など他の評価軸では予測値が中央に偏るなどの問題が見られた。構築したモデルを用いて、ユーザが声の印象をスコアとして入力し、それに近いライブラリを探索できる Web サービス「声色見本帳」を実装した。気軽に利用できる Web サービスを通じて目的に適した声との出会いを促進し、求める声質を持つライブラリを効率的に探索できたり、埋もれがちな多様なライブラリへ活用機会の増加が期待できる。

### 5.2 今後の課題

今後の課題としては、機械学習モデルの改善が挙げられる。3.4 節で述べたように音響特徴量と学習手法の選定による改善のほか、運用されるサービスの活用も考えられる。例えば、ユーザの探索履歴を収集し、あるユーザの探索パラメータを実際にダウンロードページにアクセスされた UTAU 音源の評価に影響させたり、直接ユーザに評価の投票を促しその結果を用いて追加で学習を行うなど、ユーザからのフィードバックを利用した推定精度の向上手法も考えられる。サービスとしての利便性向上も課題である。探索時に用いるライブラリ間の評価スコアの類似度指標の改善や、ライブラリ情報の更新・修正機能の実装、また権利者からの削除依頼への適切な対応体制の整備などが考えられ、これらの改善を行うことでより利便性の高いサービスを目指す。

## 謝辞の例

本研究を進めるにあたり，多くの御指導，御鞭撻を賜りました愛知工大教授に深く感謝致します。

また，御討論、御助言していただきました，○×大学工学部電子情報工学科の山谷川介教授，および山谷研究室のみなさんに深く感謝致します。

最後に，日頃から熱心に討論，助言していただきました愛知研究室のみなさんに深く感謝致します。

